

百花斉放・60年代初期 美術手帖 1971.10 からの抜粋
刀根康尚（音楽家/美術家 etc）

〈具体〉と〈九州派〉については、アンフォルメル旋風から読売アンデパンダンの末期にいたる美術運動のなかで、この地方の美術家集団が美術におけるもっとも尖鋭な部分を担ったことは、近代美術史の上で今まで例をみなかった。

そして、〈具体〉がインターナショナリズムを指向し、〈九州派〉がナショナリズムを指向するといったように、この二つの集団は、あらゆる点で対照的であった。私は展覧会の事情に関してまったく無知なのだが、それぞれの運動が、官展、公募団体展、公募団体連合展、アンデパンダンという系と、文部省、新聞社、美術団体、民主団体、地方美術団体という系のからみ合う画壇の構造に、何らかの形で大きな影響を与えたことは想像に難くない。

また、アンフォルメル旋風による美術の「地すべり」といわれるものも、アンフォルメルをまともに受けたこれら 集団の運動が大きいのであろう。六〇年代の初期が、アンフォルメルのもたらした〈タブララサン〉によってはじまったことはたしかであろう。しかし、六〇年代にはいつて、いっせいに活動をはじめたこれらの集団は、むしろ絵画を行為に還元するというよりは、絵画における表現行為と日常の行動を等価に考えて、それらの相互のギャップを強引に埋めつくそうとしたなかから生まれたように思われる。